

《シンポジウム》

2016 年度シンポジウム司会報告

司会 井上 淳

2016 年度のシンポジウムは 2015 年度に引き続き「東方神化思想と西方神秘思想」をテーマとして行われた。2015 年度のシンポジウムでは、「東方キリスト教の伝統における神化思想」という副題のもとに、東方における神化思想の伝統と展開、思想の根本についての考察が行われたが、それに続く今回のシンポジウムでは「西方キリスト教における神秘思想」という副題のもとに、マイスター・エックハルト（1260 頃-1328 頃）、ニコラウス・クザーヌス（1401-64）、十字架のヨハネ（1542-91）における神秘思想について論じられた。

シンポジウムに先立ち、八巻和彦氏は「シンポジウム連動報告」として、中世初期からエックハルトに到るまでの西方における神秘思想の流れを概観した。特に焦点が当てられたのは、擬ディオニュシオスの思想の西方における受容について、クレルヴォーのベルナルドゥスの神秘思想の特性とその影響について、女性神秘主義の成立と展開についてであった。この報告により、東方の思想を継承しつつも独自に展開された西方の神秘思想について視界が照らされ、シンポジウムへの格好のイントロダクションとなった。

シンポジウムでは、まず田島照久氏がエックハルトにおける神認識の問題について論じた。田島氏によれば、東方の神化思想の伝統はエックハルトにおいて「魂の内における神の子の誕生」「神性への突破」という独自の教説によって受け継がれており、それは彼の恩恵論に基づくもので、神の似姿を成就する方途として「魂の離脱」が説かれている。そして、神の子の誕生や神性への突破を可能とする根拠には彼独自の *imago Dei* 理解があり、キリストの受肉理解がある。我々人間はキリストの受肉によって神

の養子とされたのであり、人間の魂は内在的超越としての神を宿す存在なのである。しかしすでに神の養子とされているにもかかわらず、さらに魂の内における神の子の誕生や神性への突破が説かれるのはなぜか。田島氏はその理由を、エックハルト神学の基本構造である本質的始原論の有する「神の恩恵の働きの始原と終焉の同一」という観点から究明し、ロゴスの受肉理解に基づくキリスト中心主義の様相がそこに読み取れることを示した。

続いて阿部善彦氏は、クザーヌスの神化思想を中心に論じ、西方神学にも十分な神化思想の伝統があることを示した。阿部氏は、アウグスティヌスからトマス・アクィナスに至るクザーヌス以前の西方神学における神化思想の伝統を概観した後、クザーヌスにおける神化思想を『神の子であることについて』を中心に読み解く。そして、東方神学では「創造から神化まで」という創造と救済史全体の中に神と人間の関係が捉えられているが、西方神学には神化思想が欠落しており「墮罪から贖罪まで」の関係しか捉えられていないという A. Louth の見解に対し、それはクザーヌスの思想には当てはまらないことを指摘する。阿部氏によれば、クザーヌスにおいて神化思想が欠落していないことは明白であり、全創造の完成としての神化という創造・救済史的展望もクザーヌスに顕在である。クザーヌスには、東方神学に比較し得るような、可感的世界を含む全創造がそれによって完成へと向かう、受肉と神化の救済史が見いだせるのである。

最後に鶴岡賀雄氏は、西方神秘思想の伝統における十字架のヨハネの位置と意義について論じた。鶴岡氏は、十字架のヨハネにおいても神秘思想の終極点は、神化すなわち神との合一であり、神の養子となることであり、キリスト教神秘思想の核心に根ざしたものであることを示した後、彼はこの「神化」をどのような観点から問題にし、語ろうとしているのかを考察する。鶴岡氏によれば、十字架のヨハネの「合一＝神化」論は、この世界と関わる際の「観点」の変容の過程を物語るものという性格を持ち、「この私」がいかにそれを実現しうるかという実践論である。そしてその基本的性格を次のように分析する。神化を実現するのは神との関わりの中に置かれた「私」である。そしてその「私」がどのようにして神化への道を辿るかという「物語」の構造がとられる。「この私」における神化の実現の過程を語ることにはアピラのテレジアの影響があるが、しかし彼は、キリストによる人間の神化が端的に示唆されている聖書の言葉に戻り、愛の物語として語ることによって、個人化されたそれをもういちど一般化・原理

化している。彼の語る言葉は素朴なものに見えるが、神秘的な魅力を持っており、それが近世・近代への影響力の源泉となった。鶴岡氏は、「神」を主語に置いて言うことがすべて「私」を主語にして言えるような主体となること、これが十字架のヨハネが「人間の神化」という事態に見ようとしたことだったと結論づけている。

質疑応答ではフロアから多くの質問が寄せられた。本誌に「意見」を執筆されている方以外の方からの質問をいくつか紹介すると、「人間の神化への道の根拠としてキリストの十字架と復活に対する使徒たちの根源的な経験があるわけだが、出来事としての十字架ではなく使徒たちの生の根底に働いているそうした経験は、我々自身の経験ともなりうると思う。提題者のそれぞれの方の魂ないし意志の内に働くこととして、それをできればご自分の言葉で語っていただきたい」、「東方では、神化の重要な契機として典礼があるが、西方ではどうなのか。いわゆる *contemplatio* の場面が重要なのか。神化ないしフィリアチオが起る具体的な場面について教えてほしい」、「人間の究極的完成において他者はどのように位置づけられているのか。私と神との関係だけでなく、他者との関係はどうなのか」、「十字架のヨハネについての提題では超越的な合一として類似による合一が挙げられていて、これは類比とも言い換えられているようだが、エックハルトやクザーヌスでは合一ということの中で類比が語られている、あるいは語りうるのか」等々である。質問の一つ一つに誠意をもって丁寧にお答えになれる提題者の方々の姿が印象に残り、すばらしいと感じた。

今回のシンポジウムを通して、西方における神秘思想の伝統について、その根底に東方ともつながる「神化」の流れが顕在することが確認できた。西方のキリスト教思想といえば理性的・理論的な側面が強調されがちであるが、キリスト教思想の核心にはキリストの受肉の神秘があるということをお忘れのべきではないであろう。またエックハルト、クザーヌス、十字架のヨハネそれぞれの思想についての理解も深められた。東方と西方の比較という視点から望んだこの2回のシンポジウムは非常に有益な成果をおさめることができたのではないかと思われる。
